

昔むかし、大きな森に、きつねがいつびきすんでいました。

ある日、きつねは、ひどくお腹を空^すかせていました。そこへ、魚売りの荷馬車が通りかかりました。きつねは後ろからこつそりと荷馬車に飛び乗り、マスやら何やら、おいしい魚を食べはじめました。魚売りは、前のほうにすわつて荷馬車を走らせていたので、ぜんぜん気がつきませんでした。

やがて、魚の頭をバリバリとかみくだく音がしたので、魚売りは、何の音かと思つてふり返りました。そして、きつねを見つけると、むちを一発くらわせました。きつねは、ふつ飛ばされて、道に長々とのびてしまいました。

魚売りは、きつねが死んだものと思つて、

「こいつの毛皮を市へ持つて行つて売つてやろう」と考えました。魚売りはきつねを荷馬車に投げあげて、また、荷馬車を走らせて行きました。

きつねは、荷馬車の上でしばらくじつと横たわっていましたが、やがて、こそこそと起き上がりました。

「死んだかどうか確かめないなんて、なんてまぬけなんだ」と、きつねは思いました。そして、魚を次から次へと荷馬車から投げ落とし始めました。魚売りは、ぜんぜん気がつきません。きつねは、魚をぜんぶ投げ落とすと、自分も荷馬車から飛び下りました。魚売りは、からっぽの荷馬車に乗つて行つてしまいました。

きつねは、道に沿つて落ちている魚を集めて、食べはじめました。

きつねが、魚の山のそばにすわつて食べていると、くまのそのそやつて来ました。

「きみは、こんなにたくさん魚をどこで手に入れたんだね」と、くまはいました。きつねは、「しっぽで取ったのさ」と答えました。

「おれもできるかな」

「うん、きみだつてうまくやれるさ。湖の水に穴^{あな}を開けて、しっぽを穴にたらすんだ。魚がしっぽにかみついたら、引き上げればいいのさ」

「それならむずかしくはないな」

「そうだね。でも、魚がかみついても、すぐにしっぽを引きあげてはいけないよ。魚が離れてしまわないように長いこと待つてから、思い切り引つ張るんだ」

くまは、

「親切にありがとう」とお礼をいつて、湖に出かけて行きました。そして、氷に穴を開けてしつぽをたりました。

くまは、ずいぶん長いあいだしつぽをたらしていました。やがて、ようやく魚がかみついたように思つて、くまはうれしくなりました。でも、魚が離れてしまわないように、さらに長いあいだしつぽとすわつていました。とうとう、これでしつかり食いついたと思つたところで、力いっぱいしつぽを引つ張りました。

「いたいっ！」

くまがふり返つてみると、しつぽの切れ端^{はし}が氷の中から突き出していました。このときから、くまのしつぽは短くなつたといふことです。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話3』櫛田照男訳／ぎょうせい